

注

- 1) Cf. F. Mossé, *A Handbook of Middle English*, trans. J. A. Walker (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1952), § 166.
- 2) Cf. 杉山, 「ME 散文 *The Cloud of Unknowing* における名詞修飾構造」, (「文芸と思想」 №42, 1978年)
- 3) ここでは主要語の前位置・後位置の交代が可能な形容詞, 過去分詞, 現在分詞のみを対象とする。
- 4) 但し, この場合, 冠詞・限定詞類は計算に入れない。なお, 使用したテキストは P. Hamelius, ed. *Mandeville's Travels*, EETS, OS, 153. である。また, 比較の対象として以下の三テキストを使用した。P. Hodgson, ed., *The Cloud of Unknowing*, EETS, OS, 218, R. W. Chambers & M. Daunt, ed., *A Book of London English 1384—1425*, (Oxford: Clarendon Press 1931), I~II (1389), G. G. Perry, ed., *English Prose Treatises of Richard Rolle de Hampole*, EETS, OS, 20. (本文中ではそれぞれ *Cloud*, *London*, *Rolle* と略記)
- 5) この点に関して H. J. Meer, *Main Facts Concerning the Syntax of Mandeville's Travels*, (1929, Utrecht) ではわずかに次のような指摘があるのみである。
'Attributive adjuncts consisting of an adjective are often placed after the noun than in Modern English.' (§ 428), 'When two or more adjectives qualify a noun they are sometimes treated as in Modern English, but very often they both follow...or one precedes and the rest follow...' (§ 429).
- 6) 例文末尾のアルファベットはテキスト名を表わす略号の頭文字を表わし, 数字はその頁数を表わす。なお, *Mandev.* の場合は頁数のみ表示。
- 7) 後置された限定形容詞, あるいはその相当語を, Zandvoort は 'semi-predicative rather than attributive' と表現している。Cf. *A Handbook of English Grammar*, § 702 & 703.
- 8) 後置されたAが複数個である場合, 便宜上Nに近い位置のものから A_1, A_2, A_3 ...と表示する。
- 9) この点に関して K. Brunner は文体上の変化を狙ったものであることは認めながらも, 詳細は不明であるとする。但し, 彼はANA型とAN&A型を区別せず同一に論じている。Cf. K. ブルンナー『英語発達史』(大修館, 1973), P. 450.
- 10) H. J. Meer は限定的に用いられた過去分詞に関して次のような指摘をしている。
Perfect participles, too, favour post-position, even when their adjectival meaning would cause them to stand before the noun in Modern English. (*op. cit.*, § 434)
- 11) *ibid.*, pp. XI-XII.

それぞれに相当の修飾語句を伴って、機能的には完全に叙述的と云ってもよいほどである。

さらに語順の観点から次の例を見てみると

•ccc• perles oryent gode t grete t knotted... (130)

grete perles fyne t oryent t abouen made with... (142)

構造的には先述のように130が ANA (A&A&A) であるのに対し、142は AN (A&A&A) であると考えられる。この二例は同じNをもち、形容詞 'grete' と 'oryent' を伴っているが、たまたまこの二つの形容詞の位置が両者で異っている。'oryent' は後置される場合130の位置がふつうであるが、142では付加的・叙述的に並置され、音声的軽重から 'fyne' に後続するものと思われる。'grete' は130においては前位置に数詞が来たため後置されて、'oryent' の場合と同様の理由により、'gode' の次に配されたものと推測される。なお、AAN型においては 'grete oryent perles' の語順で二例見られる。

5. 以上、*Mandev.* に関して、限定形容詞及びその相当語(句)が二個以上主要語にかかる場合に限って、主要語に対して後置された構造をもつものを中心に見てきた。この点に関して *Mandev.* は、少くとも今回比較の対象としてとりあげた他のテキストと比べて、いくつかの顕著な相違を示していることが明らかになった。つまり、それを集約して云えば、*Mandev.* では限定形容詞類が主要語に対して後位置に配されることは極めて普通で、その構造も多様であるということである。また、その後置される限定形容詞類は他に比して量的にも自由度が大きく、4~5個連なる場合も少くない。そしてそのいくつかは独自の修飾語句を伴い、ほとんど独立的な叙述機能を帯びることになる。即ち、この *Mandev.* では限定形容詞の 'normal position' とされる主要語前位置にあっては不可避な統語的限界を、後位置に配することによってかなりな程度緩和し、比較的長い修飾語句をもつ独特の文体を成していると言えよう。

ここで当然、*Mandev.* がフランス語からの翻訳であることを考慮せねばならないが、Meerによれば、その翻訳者の基本的能度は原作の正確な訳というよりも興味ある話を構成することに関心を有していたと思われることから少くとも 'the direct influence of the original French text' は大きな問題とはならないと解してよいであろう。¹¹⁾

NA & A 構造は他に *Cloud* に一例 (pinges leueful & actyue (C162)) があるのみで ANA & A 構造に含まれる場合を別にすると他の *London, Rolle* には見られず *Mandev.* と著しい対比を示す。

4. 2. さらにこれら A の配列に関していくつかの点が指摘できる。まず、NA & A にさらに A が前置される場合、前置された A と後置の A との関係を見てみると、N に先行する A には数詞が多く、他に 'many', 'anoþer', 'fayr', 'gret (e)', 'lityll' 等が見られる。数詞を除けば、やはり前置 A は後置 A に比べて比較的限定性が弱い。

a fayr castell strong t gret t wel set vpon a roche (21), •xliij• pyl-eres of marble grete t faire (45), many toures, pynacles, t corneres full stronge t curiously made (45), blake wommen, foule t hidouse (102), a gret yle long t brode (184), •ij• charboncles grete t large (183), •ij• crosses of gold fyn grete t hye, full of precious stones (182)

102の前置 A 'blake' は限定性が強いが、この場合は N との結合の度合が密であり、ほとんど一語とみなしてよいほどのものであるため、ここでは例外的に考えてよいであろう。

他にこの ANA & A 構造は少数ながら *Rolle* に散見されるが、そのほとんどにおいて、後置された二つの形容詞は意味的に互いに対比関係にあり、且つ、接続詞に 'or' が用いられている点注目される。

oper thyng mobil or in-mobil (R12), gud dedis bodyly or gastely (R34), all thi gude dedis bodyly and gastely (R37), all thi werkes gude & ill (R44)

この型における後置 A に関して純粋に形容詞を連ねる場合、もっとも多いもので三個、さらに A が付加される場合それらはすべて過去分詞で質・量共に著しい特異性を示す。¹⁰⁾

anoþer yle gret t gode and plentifous (194), his talouns so longe t so large t gret vpon his feet... (179), a lityll cytee long t narwe t wel walled t in each syde enclosed with gode dyches (45), •ij• weles faire t noble t all envyround with ston of jaspre, of cristall, dyapred with gold t sett with precious stones t grete orient perles (185)

45や185では後置 A が 4～5 個に及び、N からの距離に比して独自に伴う修飾語句の重さも加わる。45の A₄ は前後に前置詞句を伴い、185の過去分詞群は

gode werryoures t orped t wyse, noble t worthi (103)

いずれも後位置に三個以上のAが置かれているが、前二者に見られるように過去分詞との組み合わせの場合には形容詞がNに近い位置に置かれ、過去分詞はそれに続く。178の場合、 A_1 と A_2 の間に接続詞がなく、過去分詞からなる A_2 と A_3 は文の補語ともとれ、かなり叙述的である。103においては四つの形容詞が並ぶが、 A_1+A_2 と A_3+A_4 がそれぞれ並列的にNにかかっていると解される。しかし、これまた文の補語的色彩も感じられ、限定形容詞としての力は弱い。

4. 1. 次に先の NAA に対し、二つの後置Aの間に等位接続詞 'and' が介在する NA&A 型について見てみる。

god glorious t allmyghty (4), the stone gret t large (60), the water gret t large (69), hony gode t swete (126), dyches grete t depe (141), an yle gode t gret (200)

二つのAが並列的にNを修飾するという点や、Nの前後のAの配置に関して後位に来るAの方が意味的な制限性が強いという点などは AN&A 型とほとんど変わらないようである。この二つの構造に関して相違するところは、まず、AN&A の頻度が高いのに比して NA & A 型は10例足らずであること、さらには前者における後置Aが該当する場においては冠詞を伴うのに対して、後者においては冠詞はNにのみ付加され、後続する A_1 , A_2 に伴われることはないということである。

この後置Aが冠詞を伴わないということは接続詞 'and' に関して、AN & A の場合が本質的には N & N であるのに対して、この場合は後置された二つのAを等位に結ぶものであるという構造上の相違に帰属するものであると解される。

同じ型ではあるが、次の三例では後置Aは前置詞句や副詞等によりNへの接触の度合がかなり間接的となっている。

the palays of the Emperour right fair t wel dyght (11),
all po barouns han crounes of gold vpon hire hedes full noble t riche,
full of precious stones and grete perles oryent (152), lyouns all
white t als glete as oxen (132)

上例のように他の語や句の介入によってNから遠ざけられた後置Aは当然、叙述的比重を増す。逆に云えば、叙述的色合いを持つからこそ主要語との距りを許すということも可能であろう。

Weri wrechid herte & sleping in sleupe (C14)

Mandev. では後置 A は形容詞であったのに対して、上例に見られるように *Cloud* の二例はそれぞれ数詞と現在分詞となっており、内容的にいささか趣きを異にする。特に頻度の点では際立った差が見られ、それは従って *Mandev.* の特徴的な一面として指摘できよう。

3. 3. 上記の型の後位にさらに A が 'and' を介して続くことがある。AN&A の場合の後置 A は先行する N が冠詞を伴っている場合には同じく冠詞を伴うのが通例であるが、後置 A が二個連なる場合にも同じことが云えるようである。

a full fair cytee t a gode t a wel walled (10), a gode lle and a fair t a gret (17), a full gret lord t a riche t a myghty (125)

10では副詞 'wel' が挿入されているとは云え、過去分詞 'walled' の前にも冠詞がそえられている点、注目される。

しかし、常にそうであるとは限らない。

an yle þat is clept NACUMERA þat is a gret yle t good t fayr (130)

ここでは後位置に冠詞は見られない。もっとも、この場合には 'good' と 'fayr' は限定形容詞ではなく補語と考えられなくもないが、前者ととる方が自然であろう。

CHATAY is a grete contree t a fair, noble t riche t full of marcha-
unten (140), And the beste cytee in the yle of PENTEXOIRE is NYSE
þat is a full ryall cytee t a noble and full riche (179), And he hadde
a full fair castell t a strong in a mountayne, so strong t so noble
þat... (185)

140, 179では A₂ のみ冠詞を伴い、A₃ には見られない。185でも A₂ に冠詞が見られるのみであるが、しかし、この場合には A₃, A₄ が 'so...þat...' の枠の中に入っているため少し事情は異なる。また前二者はそれぞれ a (noble and full riche), a (fair, noble t riche) と考えることもできよう。

N が不定の複数形である場合は勿論、不定冠詞は関係ないが、別の視点から次の三例を見てみると、

grete schippes t faire and wel ordeyned t made with halles t chambres
t oper eysementes, ... (139), grete stonnes t passynge huge, wel
symented t made strong for the maystrie (178), For þei ben right

じであるが、この場合、‘platt’ と ‘pleyn’ の関係は累積的ではなく、明らかに並列的に ‘face’ にかかっている。このような場合、 A_1 と A_2 の間に接続詞 (and) が挿入されるのが普通であり、たしかにこれは上記一例のみで他のテキストにも見られない。このような型が可能なのは一つには後置された形容詞に副詞が付加されることによって叙述的な要素が強まってくることによるものであろう。

次のような例も見られる。

lyouns all white gret t myghty (193)

$NA_1A_2 \& A_3$ という型であるが、 NA_1 を $A_2 \& A_3$ が修飾している、いわば上記累積的修飾構造の NA_1A_2 の A_2 が二つのAからなっている型である。

以上、 $NAA (\&A)$ の型はいずれも各一例のみで頻度としては極めて低く、他のテキストでは類例が見られない。

3. 1. 同じように N の前後に A を配しているが、後置 A は接触位置ではなく、接続詞 ‘and’ を介して続く型がある。

a fair contree t a playn (25), a gret lle t a gode (35), a lityl dore t a low (90), grete eres t longe (134), a full fayr palays t a noble (184), the princypall cytee t the most royall (205), a full fair palays t a noble (184), smale feet t lityll (207)

ANA の後置 A が大部分過去分詞、現在分詞であるのに対して、この $AN \& A$ 型ではそれが、少なくとも *Mandev.* では、例外なく形容詞である。

さらに N が単数の普通名詞であれば後置 A にも不定冠詞が付加されているのが通例である。この二点から考えて、後置 A の後にも明らかに、先行する N が意識されているといえよう。従ってこの場合の後置 A は本質的には前置 A であり ANA の場合のそれとは異なる。

意味の観点から、 N の前後の A について比較検討してみると、先行する A は ‘gode’ や ‘fair(e)’, ‘gret(e)’ 等の比較的限定性の弱いものが来るのに対して、後置された形容詞はより限定性の強いもの、少なくとも先行のそれよりも限定性が強いものが配置されている。また 205 に見られるように前置 A の原級に対して後置 A は最上級の型をとり、独自に ‘most’ を伴い、独立性の強いものとなっている。このようなことからこの構造における意味の重点は後置された A にあると考えることができるであろう。

3. 2. この修飾構造は *Mandev.* では頻度も高く極めて普通であるが、他のテキストの用例は稀れでわずかに次のような例が見られる程度である。

good name & able (L32 & 33), Seuenty chapitres & fiue (C3),

goddes wille Inmortall (147), grete perles orient (152), a gret ryuere berynge schippes pat gon..., (135) a gret fuyr brennyng(191)

135 では現在分詞が目的語を伴い、さらに節を従えることによって後置が必然的であるのに対して、191 ではそれが前置可能である。152 については同じ表現で他にも AAN 型、つまり grete orient perles (153) も見られる。

次の三例は後置 A が形容詞である、他のテキストからの用例である。

a nakid entente directe vnto God (C58), eny swych vitailer straunger (L33), many wronges subtiles (L34)

特に L34 の場合、後置された形容詞 subtiles は先行する N の数に呼応し、自らも複数形をとり、この時期としては稀な例となっている。

さらに、N と接触後位に置かれた A との間に他の語（副詞）が挿入されることもある。

zalowe myse als grete as RABENES (193)

•ij• smale holes all rounde (134)

193 は A が 'as...as' の中に組みこまれているのに対して 134 では all は単独で round にかかっている。⁷⁾ いずれにしても、その結果、後置された A は叙述的要素を強めることになる。この点に関し、さらに次のような例が見られる。

þere ben white gees rede aboute the nekke. (135)

ここでは後置 A が前置詞句を伴っているが、N に対して前置された A と後置の A の機能に関し、一つの対比が明白である。即ち、この場合、意味的に前置詞句 'aboute the nekke' なしには ANA は成り立たない。同時に white であり rede であることはできない。つまり、これは white が主要語 gees に対して全体的・本質的に関与するのに対して、rede は部分的・叙述的に付加されたものであると云えよう。⁸⁾

2. 2. NA₁A₂ の型、つまり、後位の接触位置に二つの修飾語が累積的に並ぶ構造も見られる。

hony plenteuous rennyng (185)

構造的には、まず 'plenteuous' が 'hony' を修飾し、その二語に現在分詞 'rennyng' がかかっているとみられるが、この型は一例のみである。これとよく似た構造で次のようなものがある。

the face all platt all pleyn withouten nese t withouten mouth (134)

型としては、A₁, A₂ がそれぞれ副詞を伴っている点を除けば上記 185 と同

Mandeville's Travels における限定形容詞 の配置に関する若干の考察

杉 山 隆 一

十四世紀散文に限って云っても限定形容詞はそれが限定する名詞（主要語）の前位に置かれるのが普通である。¹⁾ところが *Mandeville's Travels*（以下 *Mandev.* とする）にあっては、限定的に用いられた形容詞の配置がその 'normal position' に対してかなりの変化を示す。²⁾そこで小論では主に主要語の後位に置かれた形容詞相当語³⁾に関し、特に一主要語につき二つ以上の場合に限って、記述、検討する。⁴⁾

1. 限定的に用いられた形容詞あるいは形容詞相当語句（まとめてAで表わす）が名詞主要語（以下Nで表わす）の前位置に置かれる場合、これは上述のように限定形容詞の占める普通の位置であるが、それは二個以上のAが一つのNにかかる場合についても同様である。この点に関しては *Mandev.* でも特に言及すべきようなことはない。また現代英語において云われる限定形容詞間の語順と比較してもほとんど変化はなく、また構造的にもさしたる相違は見られない。

そこで以下、特徴的と思われる主要語の後位置に配されたAを含む構造⁵⁾について詳しく見て行くことにする。

2. 1. Nの接触位置の前後位にAが配された型、ANAの修飾構造は一般に見られるもので、その場合、後置されるAはほとんど過去分詞もしくは現在分詞であるのが特徴的である。

soche a priue loue put vpon þis cloude of vnknowyng (C34), any longe sauter vnmyndfully mumlyd (C75), no special synne wretyn þer-apon (C123), the badde doynge to-for seyde (L25), othyre vertus vnblendyde (R8), þaire euyll lyfe be-fore done (R45), any man or womman leuyng in þis liif (C36), a nakid entent streching into God (C135), þe nexte zeer folwyng (L39),

ところが *Mandev.* における同一構造を見てみると後置Aには過去分詞は見られず、現在分詞の他、形容詞が見られるだけである。